慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	三田の会計学：慶應義塾大学商学部創立50周年記念
Sub Title	Professors of accounting at Keio University
Author	友岡, 賛(Tomooka, Susumu)
Publisher	慶應義塾大学出版会
Publication year	2007
Jtitle	三田商学研究 (Mita business review). Vol.50, No.1 (2007. 4) ,p.1- 18
JaLC DOI	
Abstract	日本にあって初の洋式簿記書にして第2 の複式簿記書『帳合之法』，福澤諭吉の手になるこの訳書をもつ慶應義塾はしたがって，ときにこの国における近代会計（学）の原点ともされる。この塾の会計学は三邊金蔵によって拓かれ，また，その礎石は彼と小高泰雄とによって据えられた。三邊，小高を財務会計論において後継したのは山桝忠恕，會田義雄，峯村信吉，彼らによって開花したこの塾の会計学であった。財務会計論においてはこの3 教授の時代，他方，主として財務管理論においてあったのは和田木松太郎であった。
Notes	商学部創立50周年記念 = Commemorating the fiftieth anniversary of the faculty 50周年記念論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-20070400-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田商学研究
第50巻第1号
2007 年 4 月

2006年6月26日掲載承認

三田の会計学*

——慶應義塾大学商学部創立50周年記念——

友　岡　　賛

＜要　　約＞

日本にあって初の洋式簿記書にして第2の複式簿記書『帳合之法』，福澤諭吉の手になるこの訳書をもつ慶應義塾はしたがって，ときにこの国における近代会計（学）の原点ともされる。この塾の会計学は三邊金蔵によって拓かれ，また，その礎石は彼と小高泰雄とによって据えられた。三邊，小高を財務会計論において後継したのは山桝忠恕，會田義雄，峯村信吉，彼らによって開花したこの塾の会計学であった。財務会計論においてはこの3教授の時代，他方，主として財務管理論においてあったのは和田木松太郎であった。

＜キーワード＞

會田義雄，会計学，慶應義塾，小高泰雄，三邊金蔵，三田，峯村信吉，山桝忠恕，和田木松太郎

I

かの L. Pacioli の *Summa de Arithmetica Geometria Proportioni et Proportionalita*（1494年）などをもって中世イタリアより諸地へ伝播をみたいわゆる洋式簿記（ヴェネツィア式簿記），そのわが国への伝播は一般に明治初期のこととされているが，これは洋式簿記書『帳合之法』の存在があるからである。周知のとおり，『帳合之法』は1873年6月に上木された初編がわが国にあって初の洋式簿記書，また，翌1874年6月に上木された二編が（A. A. Shand のものした1873年12月刊の『銀行簿記精法』につぐ）わが国において第2の複式簿記書とされ，福澤諭吉の手になるこの訳書（原書は H. B. Bryant，H. D. Stratton，および S. S. Packard の *Bryant and Stratton's*

＊　本稿とタイトルを同じくする友岡［1997］はつぎのように言い訳をしている。

「かねてより筆者は「三田の会計学」を俎上にのぼせた論攷をものしたいとかんがえ，また，近いうちにものする予定でいるが，紙幅僅少の本稿では，ここ三田の会計学に身を置いたひとびとについての簡略な紹介のみが，なおまた，まずは（今日一般的な会計学の分類にしたがえば）財務会計論の領域にかぎって，おこなわれる」（pp.23-24（圏点は本稿））。

しかしながら，「近いうちに」としておきながら，随分と経ってしまったし，また，本稿とて凡そ「簡略な紹介」の域を出るものではない。

Common School Book-Keeping: Embracing Single and Double Entry（1871年））をもつ慶應義塾はしたがって，ときにわが国における近代会計（学）の原点ともされる（ちなみに，たとえば1988年９月，慶應義塾は三田山上にておこなわれた日本会計研究学会第47回大会はこうした理解のもと，統一論題報告の共通題目を「会計の原点……」とした）。

尤も，この書の存在のみをもって「原点」などと称されてよいのか，ということについては相応の疑問もないではないし，また，たといそのように称されるとしても，あとがつづかなければ，原点もただの点に終わる。福澤の『帳合之法』をもつこの塾が爾来130有余年，わが国における会計（学）の近代化プロセスにあって真に原点に恥じない貢献をなしてきたかどうか，は知らない。

Ⅱ

三田の会計学は**三邊金蔵**によって拓かれ，また，その礎石は彼と**小高泰雄**とによって据えられた。

慶應義塾にあって最初の「会計学」は**三邊**によって講じられた。

いまだ搖籃期のわが国の会計学界にあって独自の理論を展開した先駆のひとりとされる。その学説は搖るぎない原価主義をもって知られ，時価主義による静態的な評価論，貸借対照表価値論を否定した。資本調達の有り様にこそかんがみての支出額による評価論はいわば「評価無用論，徹底した原価主義でさしつかえないと主張する」[1]。

最後の著の「序」いわく，「此所に収拾展示する幾篇かの私見は，私が会計学を索ねて遍歴遍路求道の旅にさすらいながら，折に触れ時に臨みて，辿り行く道のかたへに折掛けた謂わば栞のようなものである。……私自身にとつては，思出多き色とりどりの忍草，愛着して自ら捨て難きものあると同時に，其のいずれもが取得原価主義に立脚して展開したものであるから，時価主義の潮流に浸つておらるる多数の人々にとつても，或はまた他山の石たるの用をなす機会もあるべきかと，私かに考うるのである」[2]。

1912年より海外留学，まずはロンドン大学政治経済学院にてかの L. R. Dicksee（バーミンガム大学商学部にてイギリス初の会計学教授を務めた（1902年～1906年）のち，ロンドン大学政治経済学院の準教授（リーダー）（1912年～）を経て1914年に同学院初の会計学教授に就任[3]。*Auditing: A Practical Manual for Auditors*（1892年）を首めとする「テキストの著者として大成功を収め，また，すこぶる多作であったため，「会計の文献は彼が独り書いたと述べても過言ではない」といわれるほどであった」[4]し，また，「許多ある著書はそのいずれについても「「Dicksee」を引くことはその

1）　會田［1989, b］p.7.
2）　三邊［1954］n.p.
3）　友岡［2005］pp.253-256をみよ。
4）　友岡，小林［2006］p.95.

問題の権威を引くこと」とされ[5]」た）の講義を聴いたものの，「聴講の回数が重なるに従つて私の不安焦燥の感は段々つのるばかり……自分の索めて居るものは，此所ではまだ簿記と表裏一体……暗澹たる前途を相望して意気消沈鉛のように重い苦悩を小さき胸に抱きながら英国を去って独乙に行つた。理論ずきの独乙の学者なら多少は必らず答えて呉れるであろうと，私かに信じたからであった[6]」。しかしながら，のちに「私は……　負債（資本主の出資を含む）＝資産　と置く英国式貸借対照表の形を採り，是を原価主義の基礎としようとするのである[7]」にいたり，「英国式貸借対照表は……決して之を非難すべき理由はないと主張し得る。と同時に英国には何故貸借対照表価値論が盛んに行われなかつたかという理由もまた了承し得るのであつて，私が嘗つて前にも述べた通り，英国には簿記はあるが会計学はないなどと考えたのは，全く自己の浅学無識無思慮を曝け出したものに他ならないと，今更ながら深く恥入り，陳謝の言葉を今は既に故人となられたディクシイ教授の霊前に捧げるばかりである[8]」。

1937年に設立をみた日本会計研究学会にあって発起人（８名）に名を列ね，初代の常務理事を務めた。

ついで**小高**が「会計学」を講ずる。

「小高博士は……三辺博士のもとで所謂景気変動論及び恐慌論の研究に従事され……小高泰雄博士の研究生活は，先ず景気変動論の研究から開始せられたのであるが，しかしこれらの研究は，留学当時，即ち昭和十二年頃に一つの大きな転換を余儀なくせられた。……この事情は全く慶応義塾大学の事情であったのだが，大学当局は小高博士が留学せられる直前になって……当時新たに注目を浴び出した原価計算論の研究を博士に委託したのである。従って小高博士は，その留学期間中，実に景気変動論と経営学，特に原価計算の二つの専門を研究課題として出発せられたのであった[9]」。

ちなみに，**三邊**，**小高**の時代は1930年代の後半より「慶應義塾大学講座　経済学」と称された叢書が慶應出版社より刊行をみている（ちなみに，第１巻は高橋誠一郎『経済原論』）が，これにおいては『会計学』（第30巻，1941年）および『経営分析』（第31巻，1943年）を**三邊**が担当，**小高**は『景気変動論』（第27巻，1938年）および『経営経済学』（第29巻，1943年）をものしている。

会計学における主要研究領域は管理会計論にあったが，財務会計論においては損益計算につながる評価論をもって会計学の第一の課題とする。原価主義，時価主義のいずれか一方のみを主張することはないものの，ときに J. A. F. Schmidt の時価主義にもとづく資本維持論を展開するなど，経営維持の見地からする会計理論の構成をもって基本的な立場とした。**小高**の弟子はつぎのように述懐している。「（三邊）先生は……講義のときに，「君，小高君は時価主義らしいね，どうし

5）友岡［2005］p.255.
6）三邊［1954］pp.2-3.
7）三邊［1954］p.33.
8）三邊［1954］p.13.
9）小島［1964］pp.323-325.

たのかね」と質問される。……このように当時から，原価主義と時価主義の２人の会計学者がいる。片方は原価主義で，片方は全く対立する時価主義を唱えるという，そういう意味でまさにここの三田キャンパスは自由な考え方の学園なのだなあと感じたのを記憶しております[10]」。

他方，「会計学（管理会計論），経営学の研究方法として実証的研究方法を重視……（小高）先生は……実際に企業におもむかれ，原価計算やら原単位計算を克明に研究され，多くの著書でその実証研究の成果を公表されておられました[11]」。

Ⅲ

次代の担い手たちが育ちはじめる。

その様子はたとえば1959年，慶應通信より刊行をみた『会計学の展開――戦後わが国における会計学の発展――』に看取することができる。**小高**と**山桝忠恕**とによって監修されたこの書は奥付には「著者代表　©　山桝忠恕[12]」と記され，「序」は「本書の上梓せられるに当たって，共著者山桝忠恕助教授が全篇にわたり綿密周到なる検討を加えられたのみでなく，その適切な助言によって幾多重要な修正が加えられた……同君は最近神戸商科大学より会計学担当のため本塾商学部に招聘せられ……このよき友を得て，本塾の会計学研究が前途に大いなる光明を得たことを信じて疑わないのである。また同君を援けて本塾講師会田義雄君と安達和夫君がそれぞれ重要な部分を執筆し，校閲せられた[13]」と述べ，構成および執筆者は以下のとおりであった。

序	小高泰雄
第１章　総説	山桝忠恕
第２章　会計学の基本問題――会計主体論を中心として――	会田義雄
第３章　監査論	伏見多美雄
第４章　資金会計論	会田義雄
第５章　減価償却論	清水竜瑩
第６章　標準原価計算論	溝呂木省三
第７章　直接原価計算論	山口操
文献目録	

なお，黒沢清（横浜国立大学学長）による書評[14]は「忠実・精細な発展史」との見出しのもと，「日本会計学の戦後の展開および現状について，生き生きとした筆でみごとに描写している」と述べている。

10）　會田［1989, b］pp.7–8（（　）書きは友岡）.
11）　會田［1989, b］p.8（（　）書きは友岡）.
12）　小高，山桝［1959］n.p.
13）　小高，山桝［1959］p.2.
14）　掲載紙などは不詳。慶應義塾図書館蔵のこの書（BC@3A@766）に切り抜きが貼附されている。

Ⅳ

三邊，**小高**を財務会計論において後継したのは同世代の３教授。**山桝**，**會田義雄**，**峯村信吉**，彼らによって開花した三田の会計学であった（その花はまだ咲いているのであろうか？）。

ひとりめは**山桝**。

「（山桝）先生は，簿記・会計・監査の諸領域にわたって卓越した業績をあげられたが，その３領域を孤立的に取り扱うことはなかった。すなわち，一方，簿記における企業資本等式を会計の前提として据えつつ，他方，監査をもって会計のゴールと位置づけることによって，その３領域の統合を企図され，ひとつの全一体としての「会計」像を構築されようとしたのである。……会計学を一個の学問たらしめるべく，統合性を徹底的に追究されたのである[15]」。また，「統合は，会計固有の方法でなされるべきことを強調されてやまなかった。つまり他の学問におけるアプローチで済むのなら，会計学は，不要であることを意味しかねない。そうであれば，「会計のことは会計に聞く」しかないであろう。そうした問題意識のもとに，先生は，勘定理論の復権・再興を会計学の最優先課題と位置づけ，勘定理論的アプローチの重要性を高唱されたのである[16]」。

1957年に発足をみた「（慶應義塾大学）商学部は……新分野を開拓しつつ時代の進展に指針を示すべき使命をになった。そのための基礎研究機関として「商学会」が設置され[17]」，「商学部が，草創の苦難に堪えて，次第にその基礎を充実していった時期……商学会は……昭和36年２月には有斐閣から，「商学研究叢書」第１巻，山桝忠恕君「監査制度の展開」を刊行[18]」，この書は「監査の歴史性・制度性に焦点を当て……英・仏・独・スイス・米の監査制度の展開……から監査の本質を抽出……わが国のあるはずの監査制度の方向付けを示唆[19]」するものであった。

「飯野君のあれが出るまでは受験参考書のベスト・セラーだったのに……」（本人談（ぼやき（？））））（飯野君のあれ，とは飯野利夫（中央大学教授（商学部））の『財務会計論』（同文舘出版，1977年）のこと）という嶌村剛雄（明治大学教授（経営学部））との共著のテキスト『体系財務諸表論――理論篇――』（税務経理協会，1973年）および『体系財務諸表論――基準篇――』（同）は「共著であるが，機械的な分担執筆の如き著書ではない。……論理展開の厳密さ……この点は他著の追随を許さない特色であろう。……論点の網羅性……他著ではほとんど触れられていない点まで事細かに言及され，卓越した見識が示されている[20]」。

15） 笠井［1996］p.98（（　）書きは友岡）.
16） 笠井［1996］p.98.
17） 宇治［1962］p.201（（　）書きは友岡）.
18） 増井［1978］p.171.
19） 友杉［1987］p.204.
20） 久野（野口）［1994］pp.133-134（ただし，これは『体系財務諸表論――理論篇――』についての評）.

ついで**會田**。

「かつて慶應義塾に会計学の「三教授」があった。山桝忠恕，峯村信吉，そして會田であった。……三者三様の存在そのものが「三田の会計学」の気風を物語っていた。……そしてまた，會田こそは，まさにその気風の体現者であった[21]」。

小高の管理会計論にもちいられたアプローチを継承したその学風は，実証の会計学，として知られる。会計学の全領域を熟し，就中，連結会計論においては先駆にして権威であった。「連結会計を課題としながら……実証的考察という私の特徴も生かされ……昭和50年６月の「連結財務諸表原則」の作成の小委員会や起草委員会に参画……この連結原則でも実証的考察を重視していること……が役立ちました[22]」。

なお，「よく私の見解は會田（會田＝間）の名にちなんでか，折衷的な見解が多いとも評されていましたが[23]」，「いわば革命方式ではなしに漸次に近代化する方式で我が国での連結会計の制度化がはかられ，その仕事に私も参加し得たのであります[24]」。

「大学人の仕事は３つあって，教育と研究と行政だという。私は會田先生ほど，この3つの分野のバランスを十分にとった人を知らない[25]」。「「大学人としての故人（會田）はこのことに尽きております[26]」」。

いまひとりは**峯村**。

まずは，減価償却論の泰斗，として知られる。理論と実際との乖離に意を払い，資本回収計算論として説いた減価償却論であった。

さらにはいわゆる物価変動会計論を手掛け，「多くの，しかもどれもが質の高い著書がある。けれど，一三年前の *Inflation Accounting*（Keio Tsushin, 1980）が最後になった。その後の峯村さんは経済学と会計学との関係に思いをめぐらしていた。峯村さんにとって，それは畢生の仕事だった[27]」。

「会計学に経済学の論理を導入すること自体が会計学の自殺行為のようなことにならないともかぎらない……私は，そのことは否定しません。しかし我われが会計といっているものは，ビジブル（visible）な，目にみえる数字からなる会計を指すかぎり，それは，必ずしも経済の実体に沿った計算構造であるとはいえないことも確かです[28]」。

３教授のうちにて最も学者らしいひとであった[29]。

21）友岡［1995］p.124.
22）會田［1989, b］p.12.
23）會田［1989, b］p.12（（　）書きは友岡）.
24）會田［1989, b］p.12.
25）佐野［1989］n.p.
26）友岡［1995］p.125（（　）書きは本稿）.
27）友岡［1993］p.93（（　）書きは本稿）.
28）峯村［1986］p.6.
29）友岡［1993］をみよ。

V

財務会計論においては如上の３教授の時代，他方，主として財務管理論においてあったのは**和田木松太郎**であった。

まずは「最近まで会計学で論ぜられたところは悉く過去計算を其の対象となし，過ぎ去つた期間の正確なる成果計算を以て窮極の目的となし来つた。……然し乍ら……未来計算の重要性をも亦軽視してはならない。過去計算，未来計算は或意味で互に相並んで企業の会計を形成する[30]」として「予算統制について……その理論と実証的研究[31]」を手掛け，ついで「経営管理上の諸問題……のうち資本に関する問題，すなわち，その調達，運用，成果配分の合理性を評価せんとするもの[32]」ないし「長期にわたる企業の生産力維持発展および経営活動の円滑なる運営とその成果の向上をはかるため，諸計算制度ならびに財務諸資料を駆使して財務の立場より経営活動を指導せんとするもの[33]」と定義する「財務管理について……その理論と実証的研究並びにケース作成[34]」を手掛け，また，「現代の企業会計を理解するため企業会計の歴史について[35]」も述べ，以下のようなかなり個性的な構成をもつテキスト『現代企業会計――理論とケース――』（泉文堂，1981年）をものしている。

第１章　企業会計の基礎
　第２節　企業会計の歴史
　　1　簿記の歴史
　　2　会計学の歴史
　　3　管理会計の歴史
第２章　複式簿記
第３章　会計学
第４章　原価計算
第５章　予算制度
ケース

なお，「著書『現代企業会計』『最新簿記提要』（泉文堂，1953年）『財務管理論』（『財務管理――理論とケース――』（泉文堂，1963年）のことか？）は広く知られているが，『日・インドネシア･英対訳会計用語辞典』（正しくは『会計用語集――日本語――インドネシア語――英語――』（和田木松太郎，1963年））は，日本人の知らないインドネシアにおける名著である。……今でもコピーとなってインドネシアで広く読まれているという。本業でない分野で留学生に対する好

30）和田木［1954］pp.1-2.
31）慶應義塾大学商学部［1966］p.104.
32）和田木［1963］p.1.
33）和田木［1963］p.11.
34）慶應義塾大学商学部［1966］p.104.
35）和田木［1981］p.1.

意からだけで本を執筆することはいかに難しいか[36]」。

Ⅵ

三田の会計学の系譜，として論述したかったが，果たせず（しかも，物故者についてのみ，にて）擱筆する。

「ただしまた，しかしながら，系譜といいうるような，いわば「学問的なつながり」をどの程度みいだしうるか？　それは善くも悪くも疑問である。――「慶應義塾は早くからして封建的な師弟関係を排斥した。もとより，この塾に師承伝受などのあるべき筈はない」（高橋誠一郎）[37]」。

（無論）未完

36）藤森［1987］p.223（（　）書きは友岡）.
37）友岡［1997］p.26.

三田の会計学者

例言

1．原則として慶應義塾は三田の，会計学の専任教員として相当の年数，勤続した者，定年退職した者，および2006年４月１日現在，在籍している者を挙げた。[38]

2．退職者（無論，物故者はのぞく）にかぎり，現職の類いを（　）書きにて示した。

3．略歴は物故者にかぎり，原則として慶應義塾におけるもののみを示した。

4．著書等の類いについては以下のとおりとした。

a．単著書をもつ者については著書等（背表紙に自身の名のあるもの（ただし，背表紙に「……ほか著」などと記されている場合の，ほか，に該るものはふくめる））（改訂版の類いはのぞく）にかぎり（したがって，分担執筆書の類い（他者が編者ないし編著者を務め，背表紙には自身の名のないようなもの）はのぞく[39]），10点程度を上限として挙げる。

b．単著書をもたない者については共著書の類い，分担執筆書の類い，ないし論攷を数点，挙げる。

c．必ずしもいわゆる主要著書の類いを選択するものではない。選択は種々の点を考慮のうえ，おこなう。また，慶應義塾在籍時に刊行されたものに局限しない。

d．書名等の表記においては新字体をもちいる。

e．排列は刊行年月日順とする。

5．排列は生年月日順とした。

三邊金蔵（1880年（戸籍上は1881年）～1962年）

1908年，慶應義塾大学部理財科卒業

1908年，慶應義塾大学部助手（理財科），1915年，同教授（理財科），1920年，慶應義塾大学教授（経済学部），1944年，同名誉教授

1931年，「会計学」により経済学博士（慶應義塾大学）の学位を取得

著書等

『戦争是非』（小泉信三との共訳）慶應義塾出版局，1915年

38）まずは経営学者と目されよう**中西寅雄**（1959年～1969年，慶應義塾大学教授（商学部）），まずは矢上の教授と目されよう**高橋吉之助**（1947年，慶應義塾大学助手（経済学部），1952年，同助教授（経済学部），1960年，同教授（商学部），1961年，同教授（工学部）），および**山本敬子**等は割愛する（なお，**高橋**については黒川［1998］をみよ）。

他方また，これも（少なくも現在は）まずは経営学者と目されよう**藤森三男**はしかしながら，個人的な訳（友岡が初めて受けた会計学関係の講義（日吉の「簿記」ないし「簿記論」（いずれであったかは忘れた）（ちなみに，テキストは**和田木**の『現代簿記提要』（泉文堂，1974年））の担当者であったこと）あってふくめることとした。

39）友岡［2007］p. ivをみよ。

『近世簿記講義』同文館，1925年
『会計学概論』大鐙閣，1927年
『会計学』丸善，1930年
『会計監査』千倉書房，1930年
『考課状の見方』春陽堂，1931年
『経営分析』東洋出版社，1938年
『会計学大意』税務経理協会，1949年
『財務諸表分析』春秋社，1951年
『会計学を索ねて』税務経理協会，1954年
ほか

小高泰雄（1901年～1969年）

1928年，慶應義塾大学経済学部卒業

1929年，慶應義塾大学助手（経済学部），1937年，同助教授（経済学部），1939年，同教授（経済学部），1957年，同教授（商学部），1969年，同名誉教授

1948年，「企業における計算制度の発展」により経済学博士（慶應義塾大学）の学位を取得

著書等

『世界軽工業論』慶應出版社，1929年
『経営計算論』巌松堂書店，1940年
『企業財務論』巌松堂書店，1941年
『原価計算と原単位計算』霞ヶ關書房，1947年
『生産管理論』霞ヶ關書房，1948年
『会計学概論』青山書院，1949年
『製造原価会計概説』中央経済社，1958年
『原価管理研究』（編）中央経済社，1959年
『管理会計講話』有信堂，1964年
『経営学――課題と方法――』東洋経済新報社，1967年
ほか

和田木松太郎（1918年～1985年）

1941年，慶應義塾大学経済学部卒業

1955年，慶應義塾大学専任講師（経済学部），1958年，同助教授（商学部），1963年，同教授（商学部），1980年，慶應義塾退職

著書等

『会社税務会計論』（小高泰雄との共著）泉文堂，1951年
『最新簿記提要』泉文堂，1953年

『予算統制制度』泉文堂，1954年
『簿記論』慶應通信，1955年
『財務管理――理論とケース――』泉文堂，1963年
『会計用語集――日本語――インドネシア語――英語――』（編）和田木松太郎，1963年
『簿記概論』（山桝忠恕との共編著）国元書房，1966年
『現代簿記提要』泉文堂，1974年
『現代企業会計――理論とケース――』泉文堂，1981年
『最新簿記提要』（坂口博との共著）泉文堂，1983年

峯村信吉（1920年～1993年）

1947年，慶應義塾大学経済学部卒業
1964年，慶應義塾大学専任講師（商学部），1970年，同教授（商学部），1986年，同名誉教授
1962年，「企業会計の減価償却手続きの資本回収計算に及ぼす効果の研究」により経済学博士（東京大学）の学位を取得
1966年，「会計理論の収益性概念と継続企業概念」により日本会計研究学会賞を受賞
著書等
『固定資産会計の理論と実務』中央経済社，1958年
『減価償却会計』中央経済社，1961年
『近代会計学原理』白桃書房，1966年
Studies in the Recovery of Capital, Keio Tsushin, 1967
Depreciation Accounting and Economic Analysis, Keio Tsushin, 1968
『会計学の基本問題――会計理論と会計的利益の概念――』有斐閣，1969年
『減価償却論』中央経済社，1970年
『会計学説史――近代会計学の展開――』同文舘出版，1972年
『財務諸表の基礎理論』中央経済社，1977年
Inflation Accounting, Keio Tsushin, 1980
ほか

山桝忠恕（1922年～1984年）

1945年，神戸経済大学経営学科卒業
1958年，慶應義塾大学助教授（商学部），1960年，同教授（商学部）
1960年，「監査制度の発展史的考察」により経済学博士（慶應義塾大学）の学位を取得
1963年，「近代会計理論の研究」により義塾賞，1964年，『近代会計理論』により日本会計研究学会太田賞を受賞
著書等
『株式会社の会計基準』松山商科大学消費組合出版部，1952年

『アメリカ財務会計――その性格と背景――』中央経済社，1955年
『監査制度の展開』有斐閣，1961年
『近代会計理論』国元書房，1963年
『会計学』（編）有斐閣，1970年
『近代監査論』千倉書房，1971年
『体系財務諸表論――理論篇――』（嶌村剛雄との共著）税務経理協会，1973年
『体系財務諸表論――基準篇――』（嶌村剛雄との共著）税務経理協会，1973年
『会計学基礎理論』（編）中央経済社，1980年
『文献学説による会計学原理の研究』（編著）中央経済社，1984年
ほか

會田義雄（1923年～1995年）

1954年，慶應義塾大学経済学部卒業

1962年，慶應義塾大学専任講師（商学部），1964年，同助教授（商学部），1970年，同教授（商学部），1989年，同名誉教授

1967年，「実態分析手法に基づく会社会計の研究」により経済学博士（慶應義塾大学）の学位を取得

1964年，「実態分析手法に基づく会社会計の研究」により義塾賞，1965年，『会社財務会計――わが国の実態分析に基づいて――』により日本会計研究学会太田賞を受賞

著書等

『簿記概説』（関口操との共著）慶應通信，1958年
『会計政策――その実態と限界――』中央経済社，1963年
『会社財務会計――わが国の実態分析に基づいて――』中央経済社，1964年
『実態会社管理会計』中央経済社，1966年
『連結財務諸表論』国元書房，1974年
『会計学』国元書房，1976年
『現代株式会社会計』同文舘出版，1981年
『現代会計監査』慶應通信，1983年
『企業結合会計――その実態と理論――』（編著）中央経済社，1985年
『教養会計学』（編著）第三出版，1988年
ほか

守永誠治（静岡産業大学名誉学長，商学博士（慶應義塾大学））

著書等

『株式会社簿記会計』（栗山益太郎との共著）中央経済社，1961年
『最新明解簿記論』文憲堂七星社，1962年

『財務諸表論』税務経理協会，1968年
『現代簿記精講』税務経理協会，1970年
『財務管理論』（編著）全国社会福祉協議会，1974年
『中小企業組合会計』全国中小企業団体中央会，1975年
『財務諸表論の学び方――計算編――』経林書房，1979年
『公益法人会計精説』全国公益法人協会，1981年
『非営利組織体会計の研究――民法34条法人・社会福祉法人・宗教法人を中心として――』慶應義塾大学商学会，1989年
『社会福祉法人の会計』税務経理協会，1991年
ほか

安達和夫（慶應義塾大学名誉教授，商学博士（慶應義塾大学））
著書等
『標準原価による生産統制』（訳）技報堂，1954年
『在庫品統制』（訳）技報堂，1954年
『原価計算』（山辺六郎ほかとの共著）中央経済社，1956年
『製造原価会計概説』（小高泰雄との共著）中央経済社，1958年
『管理原価会計』（山口操との共訳）日本生産性本部，1964年
『研究管理会計――企業におけるＲ＆Ｄ管理の一視点――』中央経済社，1970年
『経営原価会計』（中垣昇ほかとの共訳）日本生産性本部，1970年

藤森三男（慶應義塾大学名誉教授，商学博士（慶應義塾大学））
著書等
『意思決定と利潤計算』（伏見多美雄との共訳編）日本生産性本部，1964年
『経営分析論』慶應通信，1978年
『定性要因による経営分析――その理論と実際――』有斐閣，1983年
『オーストラリアの企業環境と経営』（編著）慶應義塾大学地域研究センター，1990年
『経営分析入門』慶應通信，1991年
『日本経済入門――日本語で学ぶ――』（野沢素子との共著）創拓社，1992年
『企業成長の理論』（山口操との共編著）千倉書房，1992年
An Introduction to Japanese Economics: A Synopsis of Japanese Economic Factors and Conditions, Sotakusha, 1993
『企業経営の基礎知識』オーム社，1994年
『ハイブリッド・キャピタリズム――東アジアの「和魂洋才」型発展――』（榊原貞雄ほかとの共著）慶應義塾大学出版会，1997年
ほか

澤悦男（外国公認会計士）

分担執筆書ほか

『国際会計基準の実務』（分担執筆）第一法規出版，1995年

「国際会計基準の動向とわが国の年金会計」『企業会計』第48巻第6号，1996年

「最近の日本における「監査の失敗」の背後原因――山一証券のケースを例に――」『三田商学研究』第44巻第5号，2001年

山口操（慶應義塾大学名誉教授，商学博士（慶應義塾大学））

著書等

『管理原価会計』（安達和夫との共訳）日本生産性本部，1964年

『原価計算』（小高泰雄との共著）慶應通信，1968年

『経営原価会計』（中垣昇ほかとの共訳）日本生産性本部，1970年

『原価会計情報システム論』慶應義塾大学商学会，1989年

『企業成長の理論』（藤森三男との共編著）千倉書房，1992年

『エッセンス管理会計』（編著）中央経済社，2001年

笠井昭次（慶應義塾大学名誉教授，名古屋経済大学大学院教授（会計学研究科），商学博士（慶應義塾大学））

著書等

『会計構造論の研究――ケーファー理論とワルプ理論との比較・分析――』同文舘出版，1986年

『会計的統合の系譜――会計構造論の類型論的体系化――』慶應義塾大学商学会，1989年

『会計構造の論理』税務経理協会，1994年

『現代会計の潮流』（編著）税務経理協会，1996年

『会計の論理』税務経理協会，2000年

『三十年一日――百花誰が為に開く――』笠井昭次，2004年

『現代会計論』慶應義塾大学出版会，2005年

新田忠誓（一橋大学大学院教授（商学研究科），商学博士（一橋大学））

著書等

『動的貸借対照表原理』国元書房，1987年

『会計学研究』（安藤英義との共編著）中央経済社，1993年

『財務諸表論究――動的貸借対照表論の応用――』中央経済社，1995年

『動的貸借対照表論の原理と展開』白桃書房，1995年

『会計学・簿記入門』（壹岐芳弘ほかとの共著）白桃書房，1996年

『会計学説と会計数値の意味』（長谷川茂との共編著）森山書店，1998年

『大学院学生と学部卒業論文テーマ設定のための財務会計論・簿記論入門』（編著）白桃書房，2002年

『エッセンス簿記会計』（編著）森山書店，2004年

『会計数値の形成と財務情報』（監修）白桃書房，2005年

伊藤眞

著書等

『外貨換算会計の実務』中央経済社，1990年

『金融商品会計の完全解説』（花田重典ほかとの共編著）財経詳報社，2000年

『Ｑ＆Ａ金融商品会計』（花田重典ほかとの共編）税務経理協会，2000年

『Ｑ＆Ａ金融商品会計の実務』（荻茂生ほかとの共著）清文社，2000年

『外貨建取引・通貨関連デリバティブの会計実務』中央経済社，2002年

『企業組織再編の会計』（加藤厚との共編著）東京経済情報出版，2003年

小林啓孝（慶應義塾大学名誉教授，早稲田大学大学院教授（会計研究科），博士（商学）（慶應義塾大学））

著書等

『企業行動と管理会計』中央経済社，1989年

『管理会計論ガイダンス――論文作成のためのテーマと文献の選び方――』（田中隆雄との共編著）中央経済社，1993年

『現代原価計算講義』中央経済社，1994年

『公認会計士第２次試験短答式原価計算演習』中央経済社，1994年

『原価企画戦略――競争優位に立つ原価管理――』（田中隆雄との共編著）中央経済社，1995年

『マルチメディア管理会計――コンテンツ・ビジネスの経営と会計――』（山根節との共著）中央経済社，1996年

『変革期の小売業の利益戦略――スーパー・コンビニ・百貨店の経営と管理――』中央経済社，1996年

『ネオ・バランスト・スコアカード経営』（伊藤嘉博との共編著）中央経済社，2001年

『事業再編のための企業評価』中央経済社，2001年

『デリバティブとリアル・オプション――ＭＢＡビジネス金融工学――』中央経済社，2003年

『リスク・リターンの経営手法――ケースでみる定量的評価・計画の実践――』（加藤芳男ほかとの共編著）中央経済社，2006年

黒川行治

著書等

『企業の決算行動の科学』（高橋吉之助ほかとの共著）中央経済社，1994年

『連結会計』新世社，1998年

『合併会計選択論』中央経済社，1999年

高久隆太

著書等ほか

「租税条約に基づく政府間協議（相互協議）手続について――米国における相互協議手続の研究と我が国における相互協議手続の在り方に関する一考察――」『税大論叢』第23号，1993年

「移転価格課税における無形資産の使用により生じた利益の帰属及びその配分」『税大論叢』第49号，2005年

「移転価格税制を巡る諸問題――移転価格課税に係る訴訟の増加の中で――(1)～(3)」『税経通信』第62巻第３号～第５号，2007年

『Ｑ＆Ａ移転価格税制――制度・事前確認・相互協議――』（佐藤正勝（編著者）ほかとの共著）税務経理協会，2007年

友岡賛

著書等

『近代会計制度の成立』有斐閣，1995年

『アカウンティング・エッセンシャルズ』（福島千幸との共著）有斐閣，1996年

『歴史にふれる会計学』有斐閣，1996年

『株式会社とは何か』講談社（講談社現代新書），1998年

『会計学の基礎』（編）有斐閣，1998年

『会計破綻――会計プロフェッションの背信――』（監訳）税務経理協会，2004年

『会計プロフェッションの発展』有斐閣，2005年

『会計士の歴史』（小林麻衣子との共訳）慶應義塾大学出版会，2006年

『会計の時代だ――会計と会計士との歴史――』筑摩書房（ちくま新書），2006年

『12歳からはじめる賢い大人になるためのビジネス・レッスン　「会計」ってなに？』税務経理協会，2007年

『なぜ「会計」本が売れているのか？　「会計」本の正しい読み方』税務経理協会，2007年

『会計学』（編）慶應義塾大学出版会，2007年

横田絵理

著書等

『フラット化組織の管理と心理――変化の時代のマネジメント・コントロール――』慶應義塾大学出版会，1998年

『組織のセルフマネジメント――概念・実例・実証分析――』（上田泰ほかとの共著）白桃書房，2005年

園田智昭

著書等

『シェアードサービスの管理会計』中央経済社，2006年

『イノベーションと事業再構築』（十川廣國ほかとの共著）慶應義塾大学出版会，2006年

前川千春

論攷

「企業観と資本維持概念」『三田商学研究』第35巻第６号，1993年

「資本維持概念と資産評価基準の関係」『三田商学研究』第38巻第３号，1995年

「取得原価評価と一般購買力資本維持」『三田商学研究』第38巻第４号，1995年

永見尊

著書等ほか

『ＳＥＣ「会計連続通牒」❶――1930――1960年代――』（分担訳，分担解説）中央経済社，1998年

『公認会計士の外見的独立性の測定――その理論的枠組みと実証研究――』（鳥羽至英ほかとの共著）白桃書房，2001年

『ＳＥＣ「会計連続通牒」❸――1970年代(2)――』（分担訳，分担解説）中央経済社，2002年

『ＳＥＣ「会計連続通牒」❹――1970年代(3)――1980年代――』（分担訳，分担解説）中央経済社，2004年

吉田栄介

著書等

『原価計算論』（興津裕康ほかとの共著）近畿大学通信教育部，2001年

『基礎から学ぶ現代原価計算』（興津裕康ほかとの共編著）白桃書房，2002年

『持続的競争優位をもたらす原価企画能力』中央経済社，2003年

『経済・経営のための統計学』（牧厚志ほかとの共著）有斐閣，2005年

『管理会計の基礎――理論と実践――』（上埜進ほかとの共著）税務経理協会，2005年

文　献

會田［1989, a］：會田義雄『随想　三田山上三十五年一日――会計学を索ねて――』。
會田［1989, b］：會田義雄「会計学を索ねて――４人の先達と４つの研究課題――」『三田商学研究』第32巻第５号（會田義雄教授退任記念号）（會田［1989, a］所収）。
宇治［1962］：宇治順一郎「経済学部 付商学部」慶應義塾（編）『慶應義塾百年史』別巻（大学編）。
笠井［1996］：笠井昭次「あすなろに徹し切った人　山桝忠恕先生」『企業会計』第48巻第９号（笠井［2004］所収）。
笠井［2004］：笠井昭次『三十年一日――百花誰が為に開く――』。
久野（野口）［1994］：久野光朗（引用箇所の文責者は野口昌良）「大学レベルの財務会計テキストの検討（1）」『産業經理』第54巻第２号。
黒川［1998］：黒川行治「組織の独立・自己責任の推進者　高橋吉之助先生」『企業会計』第50巻第９号。
慶應義塾［1958-1969］：慶應義塾（編）『慶應義塾百年史』。
慶應義塾経営会計研究室［1964］：慶應義塾経営会計研究室（編）『経営組織と計算制度』（小高泰雄博士還暦記念論文集）。
慶應義塾経営学会［1956］：慶應義塾経営学会（編）『経営会計研究』（三邊金蔵博士謝恩記念論文集）。
慶應義塾大学商学部［1966］：慶應義塾大学商学部（編）『慶應義塾大学商学部　研究テーマ集録（昭和41年）』。
慶應義塾大学商学部［1967］：慶應義塾大学商学部（編）『レクチャーズ・アナウンスメント　1967年』。
小島［1964］：小島三郎「小高先生の「経営学説」について」慶應義塾経営会計研究室（編）『経営組織と計算制度』（小高泰雄博士還暦記念論文集）。
小高，山桝［1959］：小高泰雄，山桝忠恕（監修）『会計学の展開――戦後わが国における会計学の発展――』。
佐野［1989］：佐野陽子「序」『三田商学研究』第32巻第５号（會田義雄教授退任記念号）。
三邊［1954］：三邊金蔵『会計学を索ねて』。
友岡［1993］：友岡賛「峯村さんと過ごした日々」『三田評論』第949号。
友岡［1995］：友岡賛「三田の会計学，そのひとつの時代の終焉――會田義雄博士の長逝にあたって――」『三田評論』第973号。
友岡［1997］：友岡賛「三田の会計学」『三色旗』第586号。
友岡［2005］：友岡賛『会計プロフェッションの発展』。
友岡［2007］：友岡賛（編）『会計学』。
友岡，小林［2006］：友岡賛，小林麻衣子（訳）『会計士の歴史』。
友杉［1987］：友杉芳正「山桝先生の監査学説」『三田商学研究』第29巻特別号（故山桝忠恕教授追悼号）（山桝忠恕先生13回忌追悼論文集編集委員会［1996］所収）。
日本会計研究学会50年史編集委員会［1987］：日本会計研究学会50年史編集委員会（編）『日本会計研究学会50年史』。
能勢［1956-1964］：能勢岩吉（編）『日本博士録』。
藤森［1987］：藤森三男「わが和田木松太郎先生を偲ぶ」『三田商学研究』第30巻第５号（和田木松太郎教授追悼号）（藤森［2000］所収）。
藤森［2000］：藤森三男『留念慶應義塾』。
増井［1978］：増井健一「商学部20年を顧る――定年で退かれる森五郎君を送るのを機会に――」『三田商学研究』第21巻第４号（森五郎教授退任記念号）。
峯村［1986］：峯村信吉「会計学の基礎理論」『三田商学研究』第29巻第５号（峯村信吉教授退任記念号）。
山桝忠恕先生13回忌追悼論文集編集委員会［1996］：山桝忠恕先生13回忌追悼論文集編集委員会（編）『山桝忠恕先生13回忌追悼論文集』。
和田木［1954］：和田木松太郎『予算統制制度』。
和田木［1963］：和田木松太郎『財務管理――理論とケース――』。
和田木［1981］：和田木松太郎『現代企業会計――理論とケース――』。

2006年６月26日成稿